

ホクレンの営農情報誌

ap
hokuren
agriport

アグリポート 別冊

つくる人を幸せに、食べる人を笑顔に



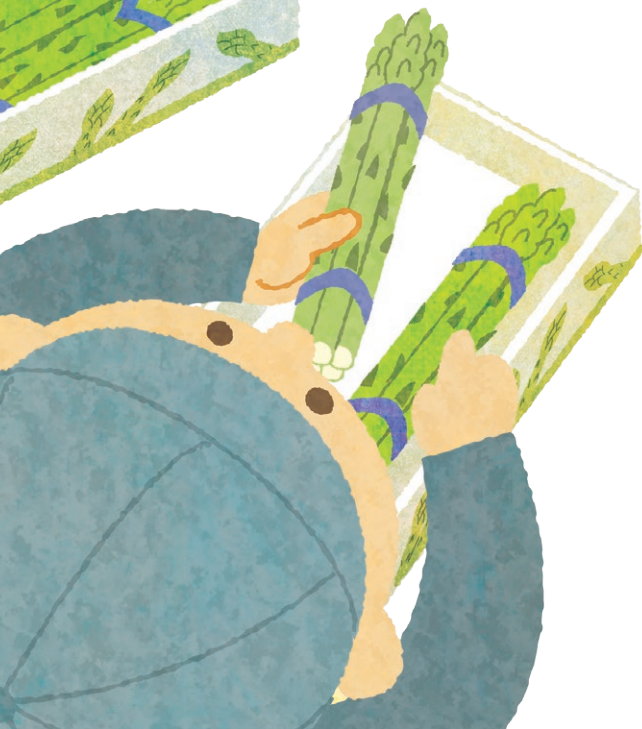
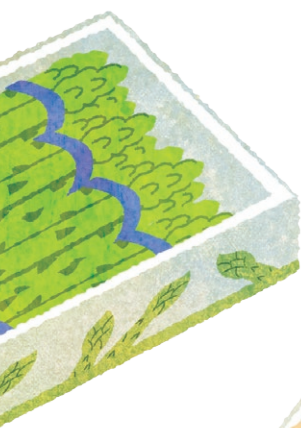
ホクレン



これから始める

「農福連携」 ガイドブック

手を取り合くと
未来が広がる！



「農福連携ガイドブック」とは？

ホクレンが発行する、これから農福連携を始めようと思っている生産者に向けたガイドブックです。障がいを抱える方や障害福祉サービス事業所と手を取り合うための心得や、現場での成功事例などを1冊にまとめました。ぜひ、ご活用ください。

最近よく耳にする「農福連携」というコトバ。

農業と福祉の分野が手を取り合うことで、農家さんにとっては担い手の確保や生産性の向上、障がいを抱える方には就労機会や収入の確保につながる取り組みです。

ウインウインのすてきな関係だとは思えるものの、こんな疑問も湧いてくるような…。

「障がいを抱える方と一緒にどんな農作業ができるの？」
「お給料はどのくらい払えばいいの？」

コミュニケーション方法や作業効率、人件費など、確かに気になることがたくさん。

まだ新しく知られていないことも多いからこそ、この冊子では事前準備や心構え、事例インタビューを通し、農福連携に前向きに取り組むためのポイントをお伝えします。

最近の社会が進んでいる方向は、誰もが心地良く働ける環境づくり。農福連携もその一つだと思います。

この取り組みは障がいを抱える方に新たな活躍の場を届ける一方、農家さんも作業工程や環境を見直し、営農改善のきっかけとなることも。きっと、お互い「プラスに働く」すてきな未来が待っています。

「農福連携」

— 耳にしたことはあるけれど…。 —

「農福連携」の心得

10歩

農福連携に取り組むにあたり、事前準備や注意点などを10歩の「心得」としてまとめました。気持ちの切り替えや小さな工夫を実践するだけでも、お互いの働きやすさにつながる例もたくさん！
今回は農福連携の「入口」に最適な障害福祉サービス事業所への農作業の委託を前提にお話を進めます。

これから始める

「農福連携」ガイドブック

Contents

05 農福連携の心得 10歩

19 Interview 農福連携のリアルレポート

- 20 三笠市「のみやまファーム」
- 22 釧路市「有限会社 仁成ファーム」
- 24 月形町「NPO 法人 サトニクラス」
- 26 新篠津村「有限会社 大塚ファーム」
- 29 静岡県三島市「JA三島^{かなみ}函南」
- 32 小清水町「JAこしみず」

36 農福連携のキホン編

38 直接雇用のギモン編

農 福連携の初めの一步は、障
がいというものを理解する
ことからスタートしましょう。話
が苦手だけれどコツコツと一つの
作業をすることが得意だったり、足
が不自由でも事務作業がスピーデ
イだったり、障がいを抱える方に
は一人ひとりに特性・個性がある
のです。

主な障がい

●身体障がい

視覚障がい、聴覚障がい、音声・
言語障がい、肢体不自由、内部障
がい（内臓機能など）の5つに分
類。先天的・後天的に音が聞こえ
にくかったり、歩行が難しかった
りする人などを指します。

●知的障がい

記憶や知覚、判断といった知的
機能の発達に遅れが見られ、社会
生活への適応が難しい状態。身の
回りのことを行うのに支障が少な
い程度から、介助が必要な最重度
まで4段階に分かれます。

●精神障がい

さまざまな原因による精神疾患
によって日常生活に制約がある状
態。統合失調症やうつ病、躁うつ
病といった気分障がい、神経症、パ
ニック障がい、適応障がいなど多
種多彩な症状が該当します。

●発達障がい

先天性の脳の機能障がいが原因
で、自閉症スペクトラム、注意欠
陥・多動性障がい（ADHD）、吃
音（症）などが幼少期のうちに起
こります。個人差が大きいところ
が特徴です。

※参照…厚生労働省ホームページなど



主な障害福祉サービス事業所

就労を希望する方々が集まって
いるのが障害福祉サービス事業所
（以下「福祉事業所」）。サービスや
活動内容も多彩なので、その種類
を簡単に紹介します。

●就労移行支援事業所

一般の企業で働くことができる
と見込まれている人に、事業所内
での作業や企業の実習、適性に合
った職場探しなどの支援を行いま
す。利用期間は原則2年間です。

●就労継続支援A型事業所

障がいを抱える方（その家族）
と雇用契約を結び、働く機会を提
供するとともに、就労に必要な知
識やスキルの訓練などもサポート。
利用期間の制限はありません。

●就労継続支援B型事業所

雇用契約を結んで働くことが困
難な方に、軽作業などの就労訓練
を提供する事業所。工賃を貰いな
がら自分のペースで働くことがで
き、利用期間の制限はありません。

知っておこう、 福祉の世界の 基本の「キ」。

●就労定着支援事業所

一般就労へ移行した障がいを抱
える方が長く働けるよう、企業や
家族などと連絡調整しながら、雇
用に伴う生活の問題に関する相談
や指導、アドバイスといった支援
を行います。（就労した障がいを抱
える方のサポート業務が中心です）

ココがポイント!

就労継続支援A型事業所で働く障がいを抱
える方は最低賃金以上が保障され、就労継続支援
B型事業所は仕事ごとに作業の工賃を決めていま
す。農場や農協施設で働いてもらう場合
は「施設外就労」として福祉事業所の
職員が同行します。



「ホントは週に5日くらいフルで働いてくれる人がいいんだけど…」これは、農家さんに限らず、企業や飲食店にとっても本音だと思います。

だけど、今やどんな職場も人手不足。早朝はシニア世代、保育園のお迎えに間に合う時間までは子育て中の主婦の方、夕方からは学校帰りの学生さんというように、働く人のライフスタイルや事情に合わせて仕事を回しています。目指すのは、障がいを抱える方も含めてみんなの力を上手く組み合わせる「ピース」な職場。そう発想を転換してみませんか？

パズルのように、
力を組み合わせるのが
「ピース」な時代。

第2歩

障

がひと一口にいつても特性はさまざま。一つの作業には驚くほど集中できるけれど、複数工程には注意が散漫になってしまふなど得手不得手があります。収穫が苦手なら袋詰め、袋詰めが上手くないなら草むしり…そんなふう一人ひとりの「得意」を發揮できる場を見つけることが大切。「意思疎通が難しい」「農作業はできないだろう」という決めつけや思い込みこそが、農福連携の障壁だったりするのです。

第3歩

ココがポイント!

作業をお願いするにあたり、障がい特性や家族の協力体制を把握することが大切。福祉事業所と事前に情報共有をしっかりとっておきましょう。

決めつけや
思い込みの壁を
取り払って。

農

福連携はここ最近の新しい取り組み。今、各所では福祉事業所との橋渡しや作業委託契約のサポートなどに積極的に乗り出しているところです。

まずはお住まいの市町村の福祉関係部署・農業関係部署といった行政窓口にご相談するのがオススメ。また、近くのJA、福祉事業所、すでに農福連携を行っている農家さんを訪ねてみるのも一つの方法です。

● JA

全国各地のJAでも、農福連携に力を入れる機運が高まっているところです。福祉事業所と農家さんのマッチングを進めているJAもあります。

● 行政

各市町村の福祉関係・農業関係の窓口、お住まいのエリアを管轄する振興局の社会福祉課や農務課、地域によっては保健所などの相談先があります。

● 福祉事業所

地域の就労移行支援事業所や就労継続支援A型事業所、就労継続支援B型事業所などに農福連携の相談を直接持ち込んでみるのも有効です。

● 農福連携の実施農家

すでに農福連携に取り組んでいる農家さんが周りにいる場合、直接アドバイスを受けるに伺うのもリアルな情報が得られます。

そうだ、周りの人に 相談してみよう。

4

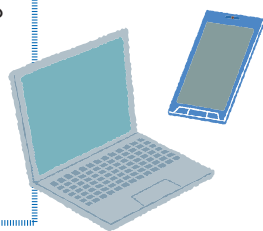
第 4 歩

コチラのサイトもチェック!

『ナイスハートネット北海道』

社会福祉法人北海道社会福祉協議会が運営する「ナイスハートネット北海道」は、北海道の障がい者授産施設・事業所(小規模事業所)などの製造販売商品だけでなく、外注委託業務(作業)の情報も掲載するWebサイト。福祉事業所によって、播種や除草、収穫作業、ダンボール箱の組み立て、野菜の選別など得意分野もさまざまです。お問い合わせ欄からは外注委託業務に関する相談もできます。ぜひ、活用してみてください。

<https://nice-heart-net.jp/>



障

がいを抱える方に仕事を覚えてもらうポイントとなる

のが農作業を細分化する「切り出し」。農家さんにとっては一連の流れと考えている作業でも、複数の手順に分けることで、障がい特性に合った仕事に生まれ変わることも。適材適所の配置をすることで生産性向上が期待できます。

また、切り出しを考えるうちにふだんの無駄な作業や危険な場所に気づき、仕事の効率化に役立つことがあります。

ココがポイント!



安全の確保や衛生面の注意点など職場のルールは明示化することも大切。張り紙やホワイトボードにあらかじめ注意事項を書き、全員が見える場所に掲示すると有効です。

一連の仕事を分解しましょう。

例えば、いちごの収穫は「摘み取り」「トレイに並べる」「トレイの積み重ね」と3つに分解することができます。仕分けにしても「選別」「計量」「箱詰め」のように、一連の作業を複数の工程に分割。こうすることで障がいを抱える方が仕事を覚えやすくなり、また多くの人が作業に関われるようになります。

分解した仕事をさらに細かく。

いちごの「摘み取り」も——①トレイを一つ取る②収穫するいちごの色味を判断③いちごになるべくふれないようにヘタをひねるように摘む——と、細分化が可能。分解した仕事をさらに細かく分けることで、障がいを抱える方の能力に合わせて任せられることも見えてくるのです。

ココがポイント!



収穫を判断する色味や仕分けの大きさ、重さの範囲など、あいまいな基準は「見える化」するのがオススメ。色見本や写真、スケールを用意して対比できるようにしておくと便利です。



農作業を細かく分解するのがポイントです。

迷わないように「見本」を用意



曖昧な基準を「見える化」

5 第 歩

ココがポイント!



道具を分かりやすく整理整頓したり、通路を整えて安全な動線を確認したりすることは、すでに働いているパートさんなどにとっても働きやすさにつながります。

農場を

整備しておくことは、
働きやすい環境を
整えること。



15

農 家さんは歩き慣れた畑でも、障がいを抱える方にとって
はちよつとしたアップダウンや小さな沢もケガにつながるかもしれません。万一のトラブルに向けて農場の作業環境を見直し、危険がないよう整備しておく必要があります。

また、福祉事業所と委託契約を結ぶ前には、福祉事業所が障がいを抱える方に対しての保険に加入していることを確認しておきましょう。

7
第 歩

出来高換算の算出例

「袋詰め」をお願いした場合

A 時給1,000円のパートさんが1時間に100袋仕上げる→1袋あたりの金額→B 障がいを抱える方のグループが1日300袋仕上げる→
単価10円×300袋=委託料3,000円

A パートさんの時給÷仕上がり=単価

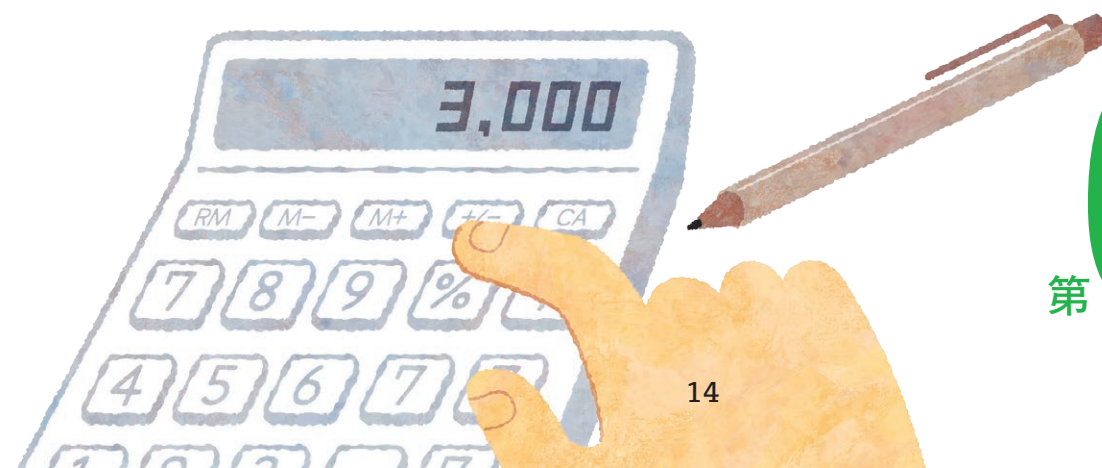


B 単価×障がいを抱える方のグループの出来高=委託料



作業の委託料を
計算してみよう。

6
第 歩



14

農 家さんが仕事を依頼する時は福祉事業所と委託契約を結ぶのが一般的です。委託料は作業の量や内容などから決めます。その計算方法は大きく分けて時給換算と出来高換算の2種類。時給換算は作業内容に関わらず金額が一定なので、お金や事務処理の管理がラクになります。出来高換算はあらかじめ各作業の料金を算出する必要がありますが、作業に見合った委託料を把握しやすいのがポイントです。

- 委託料は農家さんが福祉事業所に支払います。換算方法が時給でも出来高でも、福祉事業所を通じて障がいを抱える方に給与や工賃が支払われます。
- 就労継続支援A型事業所に委託する場合、最低賃金以上の委託料を確保する必要があります。

ココがポイント!



障がいを抱える方が農作業に携わることで働く楽しさを味わったり、既存のパートさんとの助け合いや良い雰囲気づくりにつながったり、「相乗効果」を実感しているという声も多く聞こえてきます。農福連携は周りにも良い影響を与える取り組みでもあるのです。

あ る農家さんがこういいました。「ウチの障がいを抱える方は、作業はゆっくりだけどても丁寧。最初は遠慮もあったけど、今じゃ立派な仲間なんだ」
このように障がいを抱える方も同行してくれる福祉事業所の職員も、「全員が仲間」というスタンスが大切。一人ひとりの障がい特性を理解しながら絆を深めていくと、できる仕事が増えていくことも少なくありません。

みんなが仲間
というスタンスで
信頼関係を。

第9歩

ココがポイント!



福祉事業所に持ち帰ってできる仕事もあるため、「箱折り」「ラベル貼り」「箱詰め作業」などを相談してみるのも一つの方法です。この他、農場に来てもらって、あらかじめ作業を実演し、説明することなども大事です。

コミュニケーションの取り方を理解していても、実際の指示の出し方には不安を覚えるかもしれません。農家さんが直接伝えるワケではありません。福祉事業所に農作業を委託する場合、職員が必ず同行して障がいを抱える方に指示を出してくれれます。あらかじめ仕事内容や注意点を職員に丁寧に伝え、障がいを抱える方に何を手伝ってもらえるかしつかりと相談することが大事です。

農作業の指示を
伝えるのは、
福祉事業所の
職員です。

第8歩



Interview

農福連携の リアルレポート

農福連携に取り組んでいる農家さんやJAを訪ね、
生の声をつぶさに集めました。

農業と福祉の多彩なウインウインの形や
働く人が笑顔になるポイントをレポートします。



さらに、農福連携に向けてさまざまな環境を整備することは、誰もが働きやすい農場へと進化することです。そんなウインウインの関係で、みんなが楽しく働ける職場をつくってみませんか？

農
福連携は「人手不足の解消」だけでなく、その先に大きなプラスを運んでくれる取り組みです。例えば、障がいを抱える方が農作業を担ってくれる分、農家さんは経営に力を割いてビジネスをもっと強くすることもできます。障がいを抱える方も農作業によって心が刺激され、自立心がさらに高まるケースも少なくないはずです。

農業のウインと 福祉のウインから、 誰もが働きやすい 職場へ！

第10歩



野見山さんは岩見沢保健所のサポートを受けながら、「と・わーく」と作業委託契約を結びました。障がいを抱える方はもちろん、同行する福祉事業所職員も当然ながら農業のプロではありません。シビアな判断が迫られる収穫などは熟練のパートさんに任せ、バック詰めやシール貼りの作業を用意するなど仕事を振り分けました。

「例えば、ミニトマトは熟度の進み方を見ながら収穫しなければなりません。赤いものを探るといふ指示だけでは職員さんも困ってしまいます。なので、妻が選り分けたミニトマトを200gずつパックに入れるというような作業のほうがウチとしても効率的だと考えました」

作業の効率を考えた上で、 適材適所に仕事を振り分け。

活動のようなもの。ただ、約1年ほど一緒に汗を流す中で、環境の変化や刺激の少ない仕事に、驚くほどひたむきに取り組んでくれることが実感できました」

野見山さんが農福連携に本腰を入れたのは3年ほど前。空知総合振興局が進める「障がい者農業就労推進モデル事業」として岩見沢保健所から声がかかりました。折しもパートさん向けに農作業を分解し、切り分けを考えていたタイミング。先の課外活動の経験もオーバーラップし、取り組むことを決めました。

オクラの「曲がり」が気になった場合は一度除けてもらい、後から袋詰めするかどうかを判断しています。



のみやまファーム
三笠市達布777番地
<http://www.nomifarm.com>

障がいを抱える方の中には、「こだわり派」もいるのだとか。そのため、オクラの袋詰めには10cmプラスマイナス2cmの幅を持たせたスケールを用意し、その範囲内であれば「詰めてOK」と決めていきます。

「ウチに来てくれる利用者さんは判断の苦手な方が多い反面、正確性が抜きん出ています。知り合いの農家さんにも仕事をキツチリこなしてくれるとオススメしています」

まずは福祉施設の種類の得意なことを知るのが入口。

障がいを抱える方の中には、「こだわり派」もいるのだとか。そのため、オクラの袋詰めには10cmプラスマイナス2cmの幅を持たせたスケールを用意し、その範囲内であれば「詰めてOK」と決めていきます。

「ウチに来てくれる利用者さんは判断の苦手な方が多い反面、正確性が抜きん出ています。知り合いの農家さんにも仕事をキツチリこなしてくれるとオススメしています」

まずは福祉施設の種類の得意なことを知るのが入口。

「のみやまファーム」では、作業の委託料は時給換算を参考に算出。金額はパートさ

今は農福連携の3年目。「と・わーく」も夏場に仕事があることを把握し、「のみやまファーム」を収入確保先に見込む一方、毎年働きに来る「常連の利用者さん」が事業所職員に仕事を教える一幕も。実に良い関係を築いています。最後に農福連携を始めるためのポイントを尋ねると、まずは福祉事業所の種類や障がいを抱える方の得意なことを知ることが大切だと答えてくれました。

「何より、どんな仕事の人手が足りず、どれくらいの頻度で働いてもらえば助かるのか対外的に説明できる準備が必要。僕らが『こんな仕事があります』とメニューを見せることで、福祉事業所の方もイメージがふくらみます。その上で農作業に合う利用者さんに来たらうとスムーズではないでしょうか」



代表の野見山朋秀さん。



Interview
①

農福連携の準備に
大切なこと
三笠市「のみやまファーム」

どの仕事の手が 足りていないのか、整理して 「メニュー」をつくるのがオススメです。

週に一度の農作業体験から、
農福連携に可能性を見出して。



ミニトマトを筆頭に、メロンやスイカ、オクラ、馬鈴しょなどを生産している「のみやまファーム」。現在は12名のパートさんが登録し、日に5〜6人が出勤しています。加えて農繁期の7月〜9月前半に週2〜3回、1日3時間ほど働いてくれるのが、岩見沢市の就労継続支援B型事業所「と・わーく」の障がいを抱える方々です。代表の野見山朋秀さんが、農福連携に可能性を見出したきっかけから教えてくださいました。

「以前、知り合いの福祉事業所職員にお願いされ、週に一度だけ利用者さん（福祉事業所を利用する障がいを抱える方）を3名ほど受け入れていました。当時は契約を結ぶわけではなく、委託料も発生しない課外



写真左が常務取締役・第2牧場ウイングフィールド場長の佐藤昌芳さん、写真右が音羽協働センターの桐野豊さん。

1年がかりで築いた、福祉事業所との信頼関係。

佐藤さんと桐野さんは、平成29年5月ごろから約1年間かけて委託業務の内容について協議。障がいを抱える方が最低賃金以上の収入を確保するにはどのくらいの仕事量がベストなのか、牛の健康や乳質を維持できる体制をどうつくるべきか何度も話し合いました。

「ウチの牧場では朝、昼、夕方の搾乳に伴い、ロータリーパーラーを3回に分けて掃除していました。『音羽協働センター』の利用者さんに仕事をお願いするにあたり、朝

と昼の搾乳の間に一気に清掃してもらうスタイルに切り替えることにしたんです」

当初は事業所の利用時間内（4時間半）で牛の餌箱やステンレス柵、パイプなどを掃除してもらうつもりだったとか。けれど、障がいを抱える方にとって初めての作業ということもあり、すべてを清掃し切れない日も少なくありませんでした。

「人がなかなか集まらないこの時代、私たちの仕事に力を貸してもらえただけでも十分にありがたいこと。長い時間をかけて信頼を築き、できることを増やしてもらえれば良いと考えています。なので、牛の病気につながる可能性が大きい餌箱だけは最低限キレイにしてもらうよう調整しました」

この言葉に込められた思いからも伝わる通り、佐藤さんと桐野さんが1年がかりで結んだパートナーシップは強力。委託料金も決して下げませんでした。

障がい特性に合った仕事の広がりも。

農福連携のスタートから約2年。今ではロータリーパーラーの清掃に加え、育成舎の餌押しや除糞、搾乳補助など幅広い仕事を「音羽協働センター」の障がいを抱える方が担っています。

「飽きっぽい人には続々と牛がやって来る搾乳の補助を担ってもらうなど、桐野さんと相談しながら障がい特性に合った仕事を



Interview 2
酪農家が取り組む農福連携
釧路市「有限会社 仁成ファーム」

障がいを抱える方が一生懸命働く姿に、従業員の士気も高まりました。

人材を求め東奔西走、ようやく出会えたパートナー。

経産牛と育成牛を約2300頭飼養する「有限会社仁成ファーム」。第2牧場ウイングフィールドを統括し、農福連携に踏み出したのが常務取締役の佐藤昌芳さんです。

「4年ほど前、近隣の牧場を買い取り、牛が150頭増えることになりました。ただ、業務の増加分を補えるだけの人手がなく、求人にも音沙汰なし。ほとほと困っていたところ、福祉事業所の職員と知り合いのスタッフから、障がいを抱える方に仕事を依頼する道もあると聞きました」

佐藤さんは釧路市内の福祉事業所をいくつも訪ね歩きました。けれど、仕事内容をイメージしてもらえずに肩を落とす日々。そんな時、ふと目にしたのが新聞の「農福連携」というコトバ。さっそく市役所に問い合わせたところ、福祉課につないでもらいました。

「福祉課の職員がコチラの桐野豊さんと引き合わせてくれました。今、搾乳舎の清掃や育成舎の作業をお願いしている就労継続支援A型事業所『音羽協働センター』の代表です」

桐野さんは「福祉課の職員と一緒に牧場の餌箱やパイプの掃除を見学し、コレなら利用者さんにも十分にできる仕事だと感じました」とこやかに言葉を継ぎました。

つくっています。そうそう、最近では近隣の支援学校の生徒が職場体験に来て『音羽協働センター』に入所しましたし、昨年8月には利用者さんをウチの従業員として迎え入れたんですよ」

佐藤さんの穏やかな笑顔は、人材が確保できた安堵以上に得るものが大きかったように映ります。それは一体どんなことなのでしょう？

「障がいを抱える方の仕事ぶりは、とにかく一生懸命。ウチで働くこと自体が社会との接点だと喜んでもらっているようにも見受けられます。そんな姿を日々目の当たりしているからでしょう、従業員も人に対する接し方がやさしくなったり、自分も負けれないと士気を高めたり、素晴らしい影響が広がっているんです」

農福連携は、有り体にいってしまえば業務委託の関係。けれど、最後に佐藤さんがつぶやいた「ウチの牧場としても『音羽協働センター』がなくては仕事が成り立たない。そんな本当の仲間なんです」という一言が実に印象的でした。

有限会社仁成ファーム
(第2牧場ウイングフィールド)
釧路市新野189番地4
<https://jinseifarm.wixsite.com/index/>

引きこもりの若者が、居場所を見つけた農作業体験。

月形町南部、ここは「NPO法人サトニクラス」が運営する就労継続支援A型事業所「サトニクラス 酵房」。障がいを抱える方や引きこもりの若者に、漬物製造やミニトマトの箱折り作業など仕事の場を提供しています。代表は楠順一さん。このまちの米農家に生まれ、サラリーマンを約12年経験した後に家業を継ぎました。

「私が農の世界に入ったところ、同年代の農家はすでに10年選手。同じフィールドで切磋琢磨するのも良いですが、別のアプローチから地域を盛り上げたいと考えました」

その一つが平成20年に近隣の農家の仲間と立ち上げた「月形新鮮組」。野菜の直送販売を手がけ、スーパーの一角に特設コーナーができるほど好評でした。ある時、楠さんは店舗担当者に冬でも商品が置けないか相談を受け、漬物づくりを思い浮かべたそうです。

「同じころ、札幌の引きこもりの若者を預かり、農作業を体験してもらう取り組みに携わりました。都会では自分の居場所を見つけられずに苦しんでいたようですが、自然たつぶりの環境で土にふれるのは性に合っている：と。だったら、これから始める漬物づくりも手伝ってみないかと声をかけました」

これがサトニクラスの立ち上げにつながった前夜でした。

地域の衰退を防ぐために、農業と福祉による雇用創出を。

サトニクラスの拠点は、かつて知的障がいを抱える子どもたちが暮らした「雪の聖母園」の旧寮舎（現在は町内の別の場所に移転）。設立者のカトリック神父が、有志を募って大半を手づくりした建物です。

「もともと『雪の聖母園』さんとは地元元の行事などでお付き合いがありました。園舎の移転後に使われなくなっていたこの建物を漬物製造の工房として活用したいと考え、借用をお願いしたところ快諾いただいたんです」

楠さんは平成24年にNPO法人を立ち上げ、2年後には就労継続支援A型事業所を設立。スタートにあたって膨大な事務作業をこなし、国の福祉システムを利用するた



驚くほどのスピードでダンボールを折る利用者さん。パドミントンが得意とか。

地域に雇用を生み出し、人口減少を食い止められるモデルを目指します。

農家さんが
福祉事業所を設立
月形町「NPO法人 サトニクラス」

利用者さんと話をする代表の楠順一さん(右)。



めの約600ページのマニュアルを読み込んだというから驚きです。そこまで努力を重ね、農業と福祉の二足のわらじを履いた理由は？

「月形も他の地方と同様に人口が減り、農家の戸数も減少の一途をたどっています。一方で、福祉施設にはご年配だけでなく若いスタッフの姿も多く、活気に満ちていました。福祉分野とウインウインの関係を築けば、雇用とマチの元氣も生み出せると考えたんです」

障がいを抱える方の人生に、大きな価値を提供できるのが農業。

現在、ここで働く障がいを抱える方は12名。漬物工房では数字に強い人は計量、調合が得意な人は味付けというように役割分担されています。取材中、加工責任者の職員が「みんなにも、もっと多くの仕事を覚えてほしい」と笑顔を見せてくれました。

「ウチではみんなに最低賃金以上の時給を保障する雇用関係を結び、社会保険関係も整えています。漬物の販売以外にも、JAM月形町から野菜出荷用のダンボールの箱折りを受託したり、直売所を運営したり、冬は除雪作業を受託したりして、何とか通年雇用につけています。が、正直なところ軌道に乗るまでにはあと一步の状態」

町内の農家から農作業を受託するケース



漬物工房では得意なことに合わせて役割分担。一般就労を果たした人もいます。

NPO法人サトニクラス
樺戸郡月形町字知来乙595
<https://satoniclass.com/>

「農福連携」という
コトバすらない
時代に。

トマトとミニトマトの
ハウス44棟がズラリ。さ
らに、ベビーリーフにズ
ッキーニにバジルに根菜
類…。「大塚ファーム」で
は多くの作物を農業や化
学肥料に頼らずに育て、約
30種が有機JAS認定を
受けています。代表の大塚
裕樹さんにお話を聞くと、
農福連携に取り組み始め
たのは、そのコトバすら生
まれていなかった平成7年のことでした。

「新篠津村には『北海道新篠津高等養護学校』があり、先生方も積極的に福祉の資格を取るなど非常に仕事熱心。最初は村の教育委員会から実習の受け入れを打診され、生徒たちにハウスの掃除やミニトマトの選別、誘引ひもの切断などを手伝ってもらいました」

大塚さんは障がいを抱える方と一緒に働くのは難しくないと実感。近所の福祉事業所を訪ねたり、日本てんかん協会に農作業をお願いできるか打診したり、少しずつ農福連携の可能性を探りました。

「障がいを抱える方の中には、バック詰め

やシール貼りが好きだと表情を輝かせる人も少なくないんです。僕としては仕事を手伝ってもらえる上、元氣まで届けられることをうれしく思いました」

スキルアップに伴って、
工賃を引き上げるのも大切。

大塚さんは「北海道新篠津高等養護学校」の実習を毎年受け入れながら、さまざまな連携の仕方を模索。平成23年には規格外の野菜を使ったドッグフードの販売をスタートしました。

「福祉事業所にそのジャッキーの加工を担ってもらったり、他でも鶏を平飼いしている就労支援施設にエサとなる野菜の残渣を譲る代わりに卵をいただいたりしています。今は近隣の養護学校やいくつかの福祉事業所と手を取り合っています」

現在は、屋内作業のシール貼りやバック詰め、収穫データの入力に加え、ハウス周辺の草取りや誘引ひもの切断といったメニューを用意。ハウスを見学させてもらったところ、同じ長さに切りそろえられたミニトマトの誘引ひもが印象的でした。

「最初は上手く作業を進められませんでした。が、徐々にスキルアップしていくのが手に取るように分かってきます。このように能力が上がったら、工賃を引き上げることにも非常に大切。収入確保は当然のことながら、張り合いも違ってきますからね」

Interview
4

農福連携の先を見る
フラットな視点
新篠津村「有限会社 大塚ファーム」

いろんな人と ゆるやかに連携する農業が、 大切だと思います。



鶏を平飼いする就労支援施設の職員とともにパチリ。中央が代表の大塚裕樹さん。右の男性が持っているのは、卵と交換している野菜の残渣。

北海道新篠津高等養護学校の生徒が手がけてくれたベンチ。「従業員も作業の合間に座るなど、かなり活躍しています」と大塚さん。



さらに畑を進むと、木製のベンチが田園風景に溶け込んでいました。聞けば、「北海道新篠津高等養護学校」の生徒が、材料費だけでこしらえてくれたものとか。

「ウチで行っている農業体験の参加者が使ってくれますし、婚活イベントの際にはカップルを座らせて物理的な距離を縮めることにも大成功（笑）」

生産とは直接関わりがないところでも農福連携が役に立っているのです。

息子たちが胸を張って
チャレンジしたくなる農業へ。

大塚さんとお話していると、大らかな人柄に加え、従来の手法にとらわれずにフラットな視点で農業と向き合っているように思えます。

「僕がこの世界に入ったのは20歳のころ。祖父母、そして両親から受け継いだ農場ではありますが、自分は次世代がトライしてみたいスタイルを描きたかったんです」

こう語る背景には、3人の息子さんの存在があるのだとか。子どもたちが胸を張って「僕らが家業を継ぎたい」といってもらえる農業を実践するために、時代に合った効率化を進めてきました。例えば、ハウスは全棟自動開閉システムを取り入れ、UVカットのビニールで病害虫の被害を軽減。納屋には大根を半自動でパッケージする機械も導入するなど、省力化の工夫があちこち



お話を伺いました、
経済部 指導開発課 課長 日吉 誠さん

富士山の裾野に広がる
三島馬鈴しょの名産地。

今や全国各地に広がっている農福連携の取り組み。中でも自治体とのジョイントや農作業体験の実施などユニークな活動で注目を集めているのが、静岡県の東部に位置するJ A三島函南。温暖な気候風土に抱かれた管内では、名産の三島馬鈴しょやブロッコリー、スイカ、いちごなど多種多様な農産物が栽培されています。今回お話を伺ったのは指導開発課の日吉課長です。

「私どもが農福連携を本格的にスタートさせたのは平成30年の5月。しかし、その7年ほど前から、管内の生産者が独自に福祉施設と関係を構築し、農作業のサポートをお願いしていたんです」

この生産者のお名前は前島さん。増える一方の作業と人手不足という悩みを抱えて

協議会方式を導入し、協力しあって進めています。

自治体も参加し
農福農業塾などを開催
静岡県三島市「J A三島函南」
かななみ



農福農業塾の様。福祉事業所の職員だけでなく利用者が参加するケースも。



収穫した野菜の袋詰めもコンベアを使って省力化。大きな設備投資ではあるものの、働きやすさには代えられないといいます。

大塚ファームでは1日の作業を細かく決めて事務所に貼り出しています。写真を使ったユニークな組織図には、障害福祉サービス事業所の職員の顔も。



に見られます。

「若い人にとって魅力的な農業に映らなければ、息子たちに継いでもらうことも、ましてや新たな人手を集めることも難しいと思って。僕にとっては効率化できることを効率化し、仕事を少しでもラクに進めることが時代に見合っていると感じました」

パートさん、シニア、外国人：みんなで役割分担を。

大塚さんの「農の未来を担う人が挑戦しなくなるように効率化を進める」という考え方は人材面でも同じです。一人では農業ができない、一人ができることは限られている。そんな思いから、「みんな」で仕事を進めることにウエイトを置いていきます。

「人手が足りなくなっているこの時代、ゆるやかな連携が大切。土日だけでも来てくれるパートさん、体力を使わないシール貼りを手伝ってくれるシニア、ウチではタイの大学生も働いています。障がいを抱える



有限会社大塚ファーム
石狩郡新篠津村第36線南42番地
<http://otsukafarm.com/>

方と手を取り合うのも、人材活用の選択肢の一つと考えたとスムーズではないでしょう。とにかく、みんなで役割分担をするほうが仕事がスピーディかつラクに進められると思います」

その代わり、仕事に楽しさを提供しなければならぬというのが大塚さんの持論。規格外の野菜を持って帰ってもらったり、眺めの良いテラスや水洗トイレを整えたり、カレーやシチューといった給食を用意するなど、随所に小さな工夫を凝らしています。なほ、大塚ファームのみなさんが伸び伸びと働いているように映るのは、大塚さんのすてきな心意気にふられるからなのですね。



「野外での作業は利用者さんを元気にしてくれるんです」と語る、特定非営利活動法人にじのかけ橋の鈴木副理事長。

頼を申し込むことができます。

「一方賃金は協議会が『A型事業所の最低賃金は890円』『B型事業所は最低賃金の1/3』といった設定を目安に、毎月の作業時間を集計。JAが精算事務を代行し、生産者から事業所へと直接支払われています」と日吉課長。ちなみに雇用賃金はJAと市が40%ほど負担しているとか。こうした支援策も農福連携の広がりにより役買っているようです。

また協議会では「農業経験がないので指導できない」という事業所側の声に対応するために「農福農業塾」を開講。市から委託を受けた生産者やJA職員が講師となって農作業の指導にあたっています。

「昨年は市の体験農園で、土づくりや畝立て、収穫方法など1回約3時間の講習を計7回ほど開催しました。当初は見よう見ま

ねだった事業所の職員さんも回を重ねるごとに作業や利用者さんに対する指導方法が上手になっていきますね」

作業を的確に分業化し年を通じて雇用を確保。

障がいを抱える方々にはどのような作業をお願いしているのでしょうか。

「例えば、三島馬鈴しょの収穫ですね。実は管内の馬鈴しょ畑は傾斜地に加え、小規模な畑が多いためトラクターの利用が難しい。一方、市場からは傷が少なく商品ロスが少ない管内の馬鈴しょの評価は高いため、おのずと収穫も手作業が中心になります。こういう場面に利用者さんが大活躍してくれるんです」

そのほか玉ねぎや生姜の収穫、雑草取り、圃場の片付けさらに出荷用のいちごの箱折りなど仕事量は豊富。北海道と異なりほとんど積雪をみないため、1年を通じて仕事を発注できる環境にあります。

「昨年は求人希望した農家が11戸で、年間延べ442名の利用者さんが派遣されました。一般的な農福連携はA型事業所に依頼が集中する傾向にあるようですが、当方は作業全体の78%をB型事業所に依頼しています。仕事を分業化し働きやすさを向上させた成果の一つといえるでしょう。今年は求人農家も16戸へと拡大、作業の依頼もさらに増えそうですね」と日吉課長も胸を



三島馬鈴しょと種生姜の、手作業での収穫風景。施設利用者の方々による丁寧な仕事ぶりが好評だそう。



いた際に、知り合ったのが福祉事業所（就労継続支援B型事業所）の職員だったとか。

「野外作業を経験している利用者さんもいたので、お手伝いできるのではないかと話をいただきました。当初は圃場の片付けというシンプルな作業でしたが、利用者のみなさんの理解と経験を見据えながら、次は種生姜の収穫、新たにミニ白菜やロメインレタスの定植…という風にできることを増やしていったんです（前島さん）」

こうした動向に注目したのがJA三島函南。さっそく管内の複数の生産者に呼びかけ、試験的に馬鈴しょの収穫作業を福祉事業所に依頼しました。

「これがなかなかの好評。利用者さんの丁寧な作業や懸命な働きぶりに驚く生産者さんもいましたね」

ここからJA三島函南の農福連携の取り組みが正式に始動。平成30年の協議会方式の採用へとつながっていきます。

農福農業塾の開催をはじめ独自の支援策を展開。

管内の農福連携を運営しているのは、三島函南農福連携支援連絡協議会（以下協議会）。事務局を務めるJAのほかに生産者や福祉事業所、さらに三島市の障がい福祉課な



農福連携の先駆者前島さん（右）。「作業内容から賃金まで、事業所担当者とも度々話し合いを重ね信頼関係を構築していきまし

た」

ちなみに農作業の依頼は（生産者の作業依頼書→協議会→事業所の作業申込書）というフローを経て進められるとか。協議会が仲介するため各事業所にバランス良く依頼

どで構成されています。ちなみにJAの農福連携の取り組みに行政が参加するのは全国的にも珍しいそう。

「市内に点在する福祉事業所と連携しているのが障がい福祉課。協議会に参加してもらうことで、事業所への農福連携の呼びかけや作業の依頼などが非常にスムーズに運べるんです」

ちなみに農作業の依頼は（生産者の作業依頼書→協議会→事業所の作業申込書）というフローを経て進められるとか。協議会が仲介するため各事業所にバランス良く依頼

張ります。もちろん農福連携の成果はこうした数字面だけではありません。

「生産者からは障がいを抱える方とパートナーとの間に相互扶助の思いが芽生えたという話をよく耳にしますね。一方事業所の職員からは利用者さんが病院に行く回数が減った、肥満解消に役立った、会話が増えたなどの声が届いています。いつも塞いでいた方が初めて笑顔を見せてくれたり、一歩行動が多かった方が作業の遅い利用者さんを手助けするようになったなど、心打たれる場面を目の当たりにすることも多いそうです」

さらに生産者と事業所の連携が深まることで、ジャムやソースなどの新たな加工品づくりや事業所が主体となった農園の運営など、夢はさらに大きく広がっています。

「とはいえっても農業現場はまだまだ人手不足。障がい者就労を導入しているのも組合員全体の1%にも達していません。今後も現状に満足せず、市や事業所との連携をさらに深めながら、農福連携の取り組みを拡大していきたいですね」

JA三島函南
静岡県三島市谷田141-1
<http://mkja-shizuoka.jp/>

障がいのイメージがくつがえったシンポジウム。

小清水町役場や小清水町社会福祉協議会、オホーツク障がい者就業・生活支援センター、北海道網走養護学校とともに、農福連携を力強く推し進めている「JAこしみず」。担当の渡部徳智さんと千葉伸吾さんは、取り組みのスタート地点から教えてくれました。

「小清水町は人口も農家戸数も減少の一途をたどっています。とりわけ基幹産業である農業の労働力不足はマチの課題。私たちは解決方法を探り続けていました」

そのアンテナに引っかかったのが農福連携。当時、小清水町には障がいを抱える方が利用できる施設がなく、身近にふれ合う機会がなかったと振り返ります。「障がいといえば体が不自由な方のイメージが強く、恥ずかしながら農作業は難しいのではないかと思います」と渡部さん。ところが、平成26年、北海道が主催する農福連携シンポジウムに参加したところ、イメージがくつがえったといいます。

「シンポジウムでは身体障がいだけでなく、精神障がいや知的障がいなど、体力面に不

安のない特性があることを知りました。障がいを抱える方が農作業に汗を流す事例の発表からも、小清水町で取り入れられそうだという希望が見えてきたんです」

小清水町役場にとっても人口減少を食い止める対策や雇用の場づくりは重点課題。

「JAこしみず」と保健福祉課がタッグを組み、農福連携の可能性を模索し始めました。

ポイントはアスパラの下を「3回トントン」！

JAこしみずが、農福連携の実施に向けた農作業実習に乗り出したのは平成27年。町内には障がいを抱える方に向けた福祉事業所がなかったため、網走市の「就労移行支援事業所サンライズ・ヨピト」に協力をあおぎました。

「私たちには農福連携のトライアルになる一方、『サンライズ・ヨピト』にとってもこれまで未経験だった農作業にチャレンジできる機会。お互いに意義を感じられ、話がスムーズにまとまりました。ただ、網走からクルマで1時間弱の距離や往復の交通費を考えると、業務委託まで結ぶのは難しいというのが共通の認識でした」と千葉さん。実習ではアスパラやブロッコリーの収穫、玉ねぎの収穫補助、馬鈴しょの後拾いなど、季節に合わせて多彩な農作業に協力してもらったそうです。ただし「JAこしみず」も「サンライズ・ヨピト」も、受け入れ農

農作業の切り出しのお手本！
小清水町「JAこしみず」

Interview
6

農福連携は、マチに人を呼び、農の担い手を増やすカギになります。



家さんにとってもすべてが初めての経験。マニュアルや前例がない中で手探りの試行錯誤が始まりました。

「JAの選果場で初めて行った作業がアスパラのテープ結束。障がいを抱える方には150gぐらいずつアスパラを束ね、ダンボールに入れるように伝えました。ところが、この『ぐらい』が混乱の種。中には150gピッタリにこだわる方もいて、作業が進まなかったんです。そのため、はかりの150g〜160gの部分を赤く塗り、この範囲であれば結束して良いという目印を付けました」

そう語った渡部さんは、「アスパラのテープ結束の際に茎の下をそろえる作業も、『下の部分を机に3回トントンとしてください』というスムーズでした。逆にいえば、これまで農業の世界は何とザックリした指示が飛び交っていたんだって…」と苦笑します。

作業の切り出しや明確化は、メリットがたくさん。

渡部さんは、実習を通じて具体的な指示や道具の工夫が必要なことを痛感。農場の作業でも、受け入れ農家さんはついつい「ブロッコリーの緑の部分がこれくらいいのものを採って」と手でスケールを表していたと振り返ります。

「障がいを抱える方が迷っていた様子なの



アスパラの茎を机に3回「トントン」してそろえるという指示を伝えました。

アスパラを結束する際、適正な重さの範囲に赤い目印を付けたばかり。



で、直径11㎝くらいの針金の輪にリールを付けてベルトにつなげる道具を自作しました。この輪よりも大きなブロッコリーを収穫してくださいと伝えると、スミーズに進むようになったんです。人によって細かい作業が好きなだったり、機械を使った仕事が得意だったり、向き不向きがあることも実感しました」

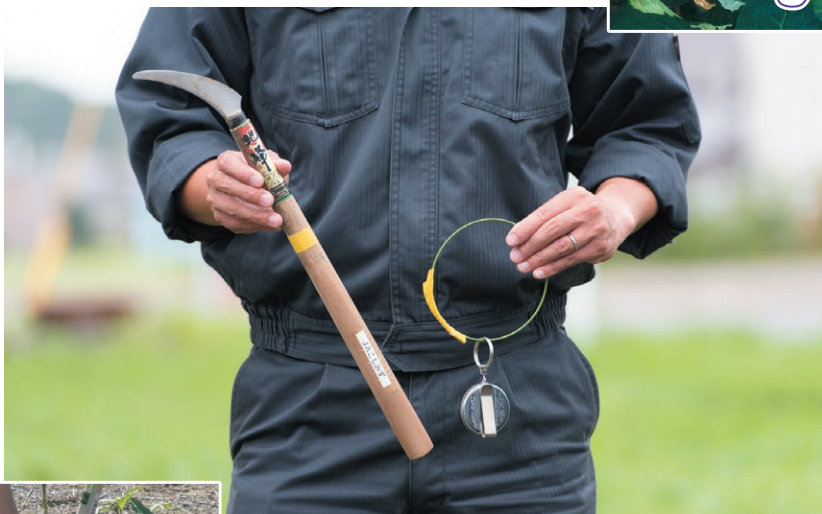


千葉さんがこう続けます。

「例えば、農家さんはかぼちゃの収穫時、規格外のものを除けることも含めて一連の作業として進めていきます。でも、障がいを抱える方に一度すべて採って集めてもらい、農家さんが後から判別するだけでも労力がグッと少なくなるんです。仕事の切り分けや細分化がいかに大事かも身を持って知りました」

こうした農作業の切り出しや基準の明確化は、農福連携に限らずとも新しく社員やパートさんを雇う時に有効。仕事を分かりやすくすることは、指導する人にとっても、覚える人にとってもメリットがたくさんあるのです。

向かって右の道具がブロッコリーの収穫の判断に使ったリール付きの輪。左はアスパラ収穫の際に目印を付けた鎌。道具に工夫するのも農福連携をスムーズに進めるために有効。



ＪＡ、行政、社会福祉協議会：思いを一つにマチの活気を。

平成27年11月には、農福連携を含む農業担い手育成プロジェクト（まちに人を呼び込み、農業の担い手を育成する施策）が「小清水町まちひとしごと創生総合戦略」の中核に。翌年はＪＡこしみずと小清水町役場、小清水町社会福祉協議会などが手を携えた福祉部会が立ち上がりました。さらに、平成29年には北海道網走養護学校の生徒とともに「農福連携実習」を行う他、農家さんや町民に向けた「農福連携セミナー」も開催。まさにマチが一つになって農福連携にギアを入れたのです。

「小清水町では小売店も減り、高校も閉校するなど苦戦を強いられています。障がいを抱える方にしても、町内に福祉事業所がないので近隣の養護学校に進学しなければならず、地元に戻ってくることも難しかったのが実情。行政、社会福祉協議会、ＪＡ：立場に関わらずマチを活気づけたいという思いは一緒なんです」と千葉さんは言葉に力を込めます。

小清水町社会福祉協議会は一連の農作業



小清水町の農業担い手プロジェクトが行った平成29年度「農福連携セミナー」のチラシ。ＪＡこしみずは、これまでの農福連携実習について報告し、その可能性を伝えました。



障がいを抱える方が実習で取り組んだ人参の選別風景。人参の水洗いや腐ったものを除去する一次選別を手伝ってもらいました。



障がいを抱える方と福祉事業所職員、農家とで安全性を考えながら、ハーベスタ上でじゃがいもの選別をしました。

ＪＡこしみず
斜里郡小清水町南町1丁目3番2号
<http://www.okhotsk.or.jp/ja-koshimizu>



作業中の事故やケガには、 どのように対応したら良いのでしょうか？

福祉事業所の職員が障がいを抱える方に事故やケガのないよう注意を払って作業をサポートし、万が一の場合も対応してくれます。施設外就労の作業委託では、保険の加入も福祉事業所が行いますが、しっかりと確認しておきましょう。一方で、農家さんも作業スペースの整頓や危険な場所への進入防止を整えるなど、安全対策に取り組んでおきましょう。労働安全に配慮して農産物の生産工程を見直すことは、「GAPをする」ことにもつながります。



障がいを抱える方が作業をする上での 工夫はありますか？

「だいたい」「これくらい」などのあいまいな指示ではなく、「〇〇個」「〇〇回」のように量や回数で示したり、道具に目安となる印を付けるなど、具体的・視覚的に工夫すると理解しやすいようです。また、休憩所や簡易トイレの設置、休憩の際の飲み物・おやつ準備なども、気持ちの良い職場環境につながります。

コチラもチェック！

「恵庭市農福連携成功事例集（作業工程マニュアル）」には、農作業の切り出しや分解の仕方、各作業の工賃（賃金）なども分かりやすくまとめられています。あわせて参考にしてください。



障がいを抱える方の全国状況や 工賃（賃金）の平均を教えてください。

全国の障がいを抱える方の総数は約964万人（平成30年現在）です。そのうち、就労移行支援事業所は約3万3000人、就労継続支援A型事業所は約6万9000人、就労継続支援B型事業所は約24万人が福祉サービスを利用しています。平均工賃（賃金）は就労継続支援A型事業所が月額74,085円、就労継続支援B型事業所が月額15,603円（平成29年現在）です。右の金額はあくまで全業種を含めた参考値。一人ひとりの就労実態や出来高に応じて適正な工賃（賃金）を福祉事業所の職員と話し合しましょう。

平成29年度平均工賃（賃金） ※〇内は対前年比

施設種別	平均工賃（賃金）		施設数 （箇所）	平成28年度（参考）	
	月額	時間額		月額	時間額
就労継続支援 B型事業所	15,603円 (102.0%)	205円 (103.0%)	11,225	15,295円	199円
就労継続支援 A型事業所	74,085円 (104.8%)	818円 (102.9%)	3,546	70,720円	795円

出典）厚生労働省ホームページ ※この工賃は食品製造や木工、クリーニング業など多岐にわたる自主・受託事業を含みます。



農福連携の キホン編



農福連携をスタートさせる上で、
気になることや小さなギモンを、Q&A形式でピックアップしてみました。
心得10歩やインタビュー記事とともにご活用ください。



施設外就労として農場に来てもらう場合、 全員で何名くらいですか？

職員配置の最低基準は、就労継続支援A型事業所・就労継続支援B型事業所の場合は利用者（障がいを抱える方）10人に対して職員1人（福祉事業所によっては利用者7.5人に対して福祉事業所職員1人）という決まりがあります。施設外就労も同様の職員配置が基準ですが、一般的には障がいを抱える方と福祉事業所職員を合わせて4～5人のグループが多いようです。



作業日程や作業時間はどう決めるの？

福祉事業所の運営・利用時間は基本的に平日の日中時間帯なので、農作業の依頼もそれに準じることになります。一般的には福祉事業所から作業場所までの移動時間なども考慮しながら、午前10時～午後4時までのコアタイムが作業時間の中心となるケースが多いようです。また、福祉事業所によっては土・日曜日や祝祭日も運営していることもある他、運営規程により運営・利用時間外の施設外就労も可能です。ただし、障がいを抱える方のプラスになるかを福祉事業所と十分に話し合しましょう。



障がいを抱える方を雇用するにあたり、 支援制度はありますか？

主に下記の支援制度や助成制度が活用できます。また、市町村といった行政が独自のサポートを行う地域もあります。

● 特定求職者雇用開発助成金 ●

(特定就職困難者コース、発達障害者・難治性疾患患者雇用開発コース)

障がいを抱える方を、ハローワーク等の紹介により、継続して雇用する労働者として雇い入れた事業主に対して助成されます。※受給要件や支給申請期間などの詳細については、お問い合わせください。

〈問い合わせ先〉管轄するハローワーク・北海道労働局

● トライアル雇用助成金 (障害者トライアルコース、障害者短時間トライアルコース) ●

障がいを抱える方を、ハローワーク等の紹介により、一定期間試行雇用を行う事業主に対して助成されます。※受給要件や支給申請期間などの詳細については、お問い合わせください。

〈問い合わせ先〉管轄するハローワーク・北海道労働局

● 農山漁村振興交付金 (農福連携対策) ●

障がいを抱える方の就労・雇用を目的とした農園(休憩所などを含む)や加工・販売施設等の整備、作業手順のマニュアル作成などにかかる経費の一部を支援する交付金です。

〈問い合わせ先〉農林水産省農村振興局 都市農村交流課

● 障害者雇用納付金制度に基づく各種助成金 ●

障がいを抱える方が働きやすい職場環境の整備などを行った事業主に対し、その費用の一部を助成する各種助成金があります。代表的なものは「障害者作業施設設置等助成金」。車いす使用者の動線を考慮した通常より広い作業所などを設置した場合、助成金(障がいを抱える方一人につき上限450万円等)が支給されます。※そのほかにも各種助成金があります。助成を受けるには一定の要件を満たす必要があります。

〈問い合わせ先〉独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 北海道支部 高齢・障害者業務課



直接雇用の場合、 賃金の基準や配慮すべき法律はありますか？

労働者には最低賃金以上を支払うことが法律(労働基準法)で義務付けられています。障がいを抱える方に支払う賃金についても最低賃金を確保した上で、農家さんは営農状況によって人件費にいくら支出できるのか考え、また障がいを抱える方の就労状況にも合わせて適切な金額を決めることが大切です。また「障害者の雇用の促進等に関する法律」では、事業主の障がいを抱える方に対する差別の禁止と合理的配慮の提供義務が規定されています。詳しくは厚生労働省のホームページに掲載していますので、「障害者雇用促進法 障害者差別禁止」等で検索ください。



直接雇用の ギモン編



農福連携の業務委託を経験し、
障がいを抱える方を直接雇用したいと思った時に役立つ、
相談窓口や助成制度などのQ&Aをまとめました。



障がいを抱える方を直接雇用したい時は、 どこに相談すべきですか？

障がいを抱える方の雇用に関する相談窓口は下記が一般的です。ぜひ、お問い合わせなどにご活用ください。

● ハローワーク ●

障がいを抱える方を対象にした求人の申し込みを受け付けているほか、事業主に雇用管理上の配慮などについてのアドバイスを実施。必要に応じて専門機関の紹介や各種助成金の案内を行っています。管轄するハローワークについては厚生労働省のホームページをご覧ください。

<https://www.mhlw.go.jp/kyujin/hwmap.html>

● 地域障害者職業センター ●

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構が運営し、北海道では札幌と旭川の2カ所に設置されています。障がいを抱える方に対して企業就職に関する相談を行うほか、

事業主に対してはハローワーク等と連携しながら、新規の雇い入れ

や採用後の職場定着など雇用管理に関する相談を行っています。

詳しくは北海道障害者職業センター(札幌・旭川)ホームページをご覧ください。

☎ <http://www.jeed.or.jp/location/chiiki/hokkaido/>

コチラもチェック！

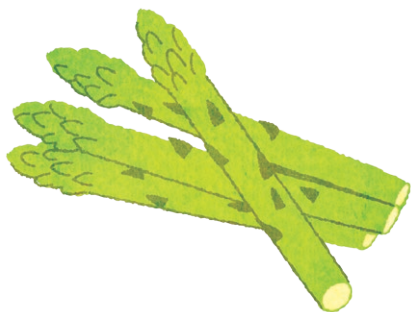
北海道障害者職業
センター(札幌・旭川)
ホームページ



コチラもチェック！

厚生労働省
ホームページ





つくる人を幸せに、食べる人を笑顔に



●発行日
2020年2月発行

●発行・制作管理
ホクレン農業協同組合連合会
農業総合研究所 営農支援センター 営農支援推進課
北海道札幌市東区北6条東7丁目375番地
TEL 011-788-5467
<https://www.hokuren.or.jp/>

●編集・印刷
H AJ (株)北海道アルバイト情報社
北海道札幌市中央区南2条西6丁目13番地1
南2西6ビル
TEL 011-223-3533
<https://www.haj.co.jp/>

●協力
北海道
社会福祉法人北海道社会福祉協議会
北海道農業協同組合中央会

